

## 村上春樹 3 「1973年のピンボール」について

p6 「誰もが誰かに対して、あるいはまた世界に対して何かを懸命に伝えたがっていた。」

p8 「とにかく遠く離れた街の話の聞くのが好きだ。…遠くの、そして永遠の交わることもないであろう人々の生のゆるやかな、そして確かなうねりを感じることもできる。」(僕)

一方で「僕」は、他者の存在に気遣っている。他者からもたらされるものに対して、執拗な関心を示している。そしてそこでもたらされるものを好んでいる。ところが、他者の存在は希薄なままだ。それは「永遠に交わることもないであろう人々の生のゆるやかな、そして確かなうねり」でしかない。「確かさ」は、ここではいかにも不確かである。

p11 「何もかもが同じことの繰り返しにすぎない、そんな気がした。限りのないデジャ・ヴュ、繰り返すたびに悪くなっていく。」(僕)

他者は何ひとつ彼にもたらさないのだ。だから、「僕」が、誰かと世界を共有しているという感覚は殆ど無いに等しい。彼と同棲することになった双子の姉妹は、殆ど他者でさえない。

p13 「名前は何？」と僕は二人に訊ねてみた。二日酔いのおかげで頭は割れそうだった。／「名乗るほどの名前じゃないわ」と右側に座った方が言った。／「実際、たいした名前じゃないの」と左が言った。「わかるでしょ？」／「わかるよ」と僕は言った。」(僕と双子)

このプロフィールの不確かさは、双子が他者ではないということ、あるいは、「僕」が「私」として「他者」の前に立っていない、ということを表している。

双子たちは明らかに「他者」であることを拒んでいるのだから、この双子たちは、殆ど「僕」の内奥の幻想でしかない。

ただ、プライベートな幻想である、とだけ言って済ませそうにないところがこの小説にはある。

「僕」と「双子」は、関係性を互いに拒みながら即かず離れずに生活している。この即かず離れずという距離感は、「僕」と事務所の女の子との関わり方にも、同様の匂いを感じられる。

他者との関わり方の曖昧さと、「僕」のニヒリスティックな感覚とは、連動するのだろうか？

世界の感受は、本当は常に新鮮だ。それはいつも「初めて」という感覚でやってくるものだ。それが無い、ということは、他者との関係性が問題なのではない。他者との世界の共有という局面は、寧ろ世界の停滞とリンクするだろう。共有は世界の変質の足枷となるからだ。

「僕」の感覚は、少々混乱している。共有世界にくたびれてしまった、ということが、世界の停滞を呼び覚ますのだ。その時、関係性は際立って「私」を縛り上げているのに違いない。

そう考えてみると、「僕」のスタンスは、「共有世界の拒絶」なのだ、ということが分かってくる。

p19 「僕は井戸が好きだ。井戸を見るたびに石を放り込んでみる。小石が深い井戸の水面を打つ音ほど心の安まるものはない。」

石が届くということ、そのことの安らぎに触れる「僕」は、己の内奥とのコミュニケーションに意識を注ぎ込んでいるのだ。村上春樹作品で多用される井戸のイメージは、「他者」から切り離された孤立した世界のイメージである点が本質的なのであろうと思われる。

他方で、他者が彼に語る見知らぬ土地の話を楽し々として聞き取る「僕」がいる。この二つのイメージは連動し得る。他者から流れ込む言葉は、彼に世界の広さを教えてくれるのだろうか。彼はずっとそのことを待ち続けてきたのだ。しかし、今やそれこそが、彼の疲弊と共有の拒絶の淵源となっているのだ。

p15 「どこまでいったところで、きっと同じような風景が永遠に続いているのだろう。」

もう一つ、形式の問題もある。

「鼠」と「僕」の物語が、あっちとこっちで、関連性無く同時進行する。これもまた、関係性の不

在を印象づけている。井戸のイメージと同じ、関係性の奪われた閉じた世界の隠喩なのだ。これらは、閉ざされた世界の中で、利己的で充実した快樂を見出す、という双子のイメージに伴うオナニズムのイメージと同根である。

他者に対して、とことん気遣い、そこに長く期待を寄せ続けてきた「僕」なのだ。しかし、今やそのような生に、とことん疲れている「僕」なのだ。

双子は、そういう共有世界にくたびれた「僕」が見ている関係性の矮小化と言って良いのかもしれない。

p24「でも忘れることなんてできなかった。直子を愛していたことも。そして彼女がもう死んでしまったことも。結局のところ何ひとつ終ってはいなかったからだ。」

彼は、恋人と死別しているようだ。共有世界に囚われて、そこから愛を汲み取りながら、共有世界にすっかり疲弊しているのだ。

双子は関係性の希薄さのイメージだ。二人いるということ、そして二人には名前がないということ、名前を拒絶しているということ、彼女たちには出自も、本来の生活も、あらゆる「何故」も一切伴わないというところに、他者であることの拒絶のイメージが見られる。双子は、その存在を「僕」の傍に置くことによって、「僕」が、関係性を拒んでいるということを明らかにしている。

p40「殆んど誰とも友だちになんかなれない」

双子は同時に、閉ざされた、関係性の不在な性的エクスタシー＝オナニズムを暗示しているように思われる。つまり電話局の男が「ねえ、旦那も大変でしょ？」と訊ねる言葉に、「僕」は「そうでもないよ」と答えている〔p53〕のだが、この言葉には、少しも無理な偽りはないのだということだ。

p41「鼠にとっての時の流れは、まるでどこかでプツンと断ち切られてしまったように見える。何故そんなことになってしまったのか、鼠にはわからない。……何処かで悪い風が吹き始め、それまで鼠をすっぽりと取り囲んでいた親密な空気を地球の裏側にまで吹き飛ばしてしまったようにも感じられる。」

一方「鼠」は、関係性の領域に飛び出して行こうとする運動を体現する存在だ。

p57「やっと灯台にたどりつくと、突堤の先に腰を下ろし、ゆっくりとまわりを眺める。空には刷毛で引いたような細い雲が幾筋か流れ、見渡す限りのまったくの青に満ちていた。青は果てしなく深く、その深みは少年の足を思わず震わせた。それは畏れにも似た震えであった。潮の香りも風の色も、全てが驚くばかりに鮮明である。彼は時間をかけてまわりの風景に少しずつ心を馴染ませてから、ゆっくりと後を振り向く。そして今は深い海にすっかり隔てられてしまった彼自身の世界を眺めた。」(鼠)

p58「そしてそれが十歳の鼠にとっての世界の果てでもあった。」

p58「夕闇が空を被い始める頃、彼は同じ道を辿って彼自身の世界へと戻っていった。そして帰り途、捉えどころのない哀しみがいつも彼の心を被った。行く手に待ち受けるその世界はあまりにも広く、そして強大であり、彼が潜り込むだけの余地など何処にもないように思えたからだ。」(鼠)

この子供の頃のイメージは、そのまま「鼠」の生の原風景であり、彼自身の現在の生の風景でさえある。彼は、自分の内奥の果てに来ているのだ。彼は、街を出て行く。その時のジェイとの会話は象徴的である。

p171「何故こじやダメなのかって訊かないのかい？」/「わかるような気はするからね」/鼠は笑ってから舌打ちした。「なあ、ジェイ、だめだよ。みんながそんな風に問わず語らずに理解し

合ったって何処にも行けやしないんだ。こんなこと言いたくないんだがね……、俺はどうもあまりに長くそういった世界に留まりすぎたような気がするんだ。」

日本的な以心伝心の対象化とも取れるこの場面は、寧ろより普遍的な決断に寄り添った場面であると思われる。「鼠」にとっては、他者との関係性を模索する旅がこれから始まるだろう。きっかけはある女性との愛情ある関係だった。その経験を踏まえて、彼は他者と出会う旅に出るのではないだろうか。

p109「何処まで行けば僕は僕自身の場所を見つけることができるのか？ 例えば何処だ？ 複座の電撃機というのが僕が長い時間をかけて思いついた唯一の場所だった。でもそれは馬鹿気っていた。だいいち電撃機なんて三十年も昔に時代遅れになっちゃった代物じゃないか。」

「僕」には自分の生の居場所が分からない。この浮遊感は、彼が共有世界の中に確かな手応えを見出せなくなっていることを証明する。かと言って、彼自身の孤独な生の実感も、今では奪われかけている、ということだ。

p111「ある日、何かが僕たちの心をつえる。なんでもいい、些細なことだ。バラの蕾、失くした帽子、子供の頃に気に入っていたセーター、古いジーン・ピットニーのレコード……、もはやどこにも行き場所のないささやかなものたちの羅列だ。二日が三日ばかり、その何かは僕たちの心を彷徨い、そしてもとの場所に戻っていく。……暗闇。僕たちの心には幾つもの井戸が掘られている。そしてその井戸の上を鳥がよぎる。」

p118「僕が本当にピンボールの呪術の世界に入りこんだのは一九七〇年の冬のことだった。その半年ばかりを僕は暗い穴の中で過ごしたような気がする。草原のまん中に僕のサイズに合った穴を掘り、そこにすっぽりと身を埋め、そして全ての音に耳を塞いだ。何ひとつ僕の興味をひきはしなかった。そして夕方になると目を覚ましてコートを着こみ、ゲーム・センターの片隅で時を送った。」

僅かに思い出の中で、自分が夢中になったピンボールの記憶が彼の中に蘇る。自分だけの世界、孤立した、誰とも何も共有しない世界の記憶だ。

p166「なんだか不思議ね、何もかもが本当に起ったことじゃないみたい。/いや、本当に起ったことさ。ただ消えてしまったんだ。/辛い？ /いや、と僕は首を振った。無から生じたものがもとの場所に戻った、それだけのことさ。/僕たちはもう一度黙り込んだ。僕たちが共有しているものは、ずっと昔に死んでしまった時間の断片にすぎなかった。それでもその暖い想いの幾らかは、古い光のように僕の心の中を今も彷徨いつづけていた。そして死が僕を捉え、再び無の埒埒に放り込むまでの束の間の時を、僕はその光とともに歩むだろう。」(僕とピンボール)

p167「僕は後ろを振り向かなかった。一度も振り向かなかった。」(僕とピンボール)

この記憶が意味しているものは何だろうか。幸福の微かな記憶は、それがどこか深いところから汲み上げられるということ、孤独な死の世界のようなところから汲み上げられるということではないだろうか。

言い換えれば、それらの時間が既に過ぎ去り、遠い内奥に去ってしまっているということだ。

p176「それはずっと先のことだ。馬が疲弊し、剣が折れ、鎧が錆びた時、僕はねこじゃらしが茂った草原に横になり、静かに風の音を聴こう。そして貯水池の底なり養鶏場の冷凍倉庫なり、どこでもいい、僕の辿るべき道を辿ろう。」

ラストの死のイメージは、安息に満ちている。しかしこの安息は、死そのものを意味していない。そうではなくて、この安息は生のある瞬間を暗示しているのである。幸福な夢の暗示なのである。遠い、彼方、死のような沈黙にみちた場所、そこに幸福感の淵源がある、と言っているの

ある。

双子が配電盤のお葬式をすることを主張する場面がある。双子は関係性の拒絶であるから、ここでも安息は、彼女たちが指し示す先、貯水池の深い底のような場所にある、と読み取ることができるだろう。

「僕は配電盤を「死なせたくない」と言う。このイメージは、後の「スリー・フリッパー」のピンボールマシンを冷たい倉庫に残して去って行く場面へと繋がり、「僕」の変化を物語る。これらは皆、役目を終えたものも、古くなってしまったものたちだ。それは人が過ぎてきた過去の一時代と同じだ。そしてこれらはすべてその人の歴史、内奥を形作るものの暗示なのである。

「僕」は、それらの「わたくし」を指し示すものを、己の内奥に葬ることを、当初上手にできない。それが、最後にはできるようになる。これは、関係性に踏み出したことを証明していると思われる。双子が最後に去って行くこととこれらのイメージは呼応し合う。

ただ、これらの進捗のイメージは、決して順風満帆といった人生の門出を表してはいないようだ。

p158「寒い。そしてやはり死んだ鶏の匂いがする。」(僕とピンボール)

p174「ジェイに話してしまった後で、たまらないほどの虚脱感が彼を襲った。辛うじて身をひとつに寄せ合っていた様々な意識の流れが、突然それぞれの方向に歩み始めたようでもある。何処まで行けばそれらの流れがまたひとつに巡り合えるものか鼠にはわからない。」

p183「「またどこかで会おう」と僕は言った。／「またどこかで」と一人が言った。／「またどこかでね」ともう一人が言った。／それはまるでこだまのように僕の心でしばらくのあいだ響いていた。／バスのドアがパタンと閉まり、双子が窓から手を振った。何もかもが繰り返される……。」

ピンボールマシンを包み込む鶏の死骸の匂い。ジェイと別れて行く鼠の虚脱感。そして双子が去って行く場面と、その後の虚無感、全てが幸福がここにはないということを物語ってはいないか。沈黙を強いられて行く世界、離れていった世界にこそ、本当の世界の実体や生の実感があるかのような、何か取り返しのつかない時間の推移への、未練のようなものが漂うのが感じられる。

寧ろ、過ぎ去った世界は、生き残るのではないだろうか。私たちは生の二重性を強いられるのではないだろうか。私たちは、己の内奥から噴き出してくる共有の拒絶を木霊のように聴き取りながら、「他者」と向き合う「私」を演じ続けるのではないだろうか。

p40「でもね、世の中には百二十万くらいの対立する考え方があるんだ。いや、もっと沢山かもしれない」／「殆んど誰とも友だちになんかなれないってこと？」と209。／「多分ね」と僕。「殆んど誰とも友だちになんかなれない」／それが僕の一九七〇年代におけるライフ・スタイルであった。ドストエフスキーが予言し、僕が固めた。」(僕と双子)

このドストエフスキーへの理解は誤っていると私には思えるが、しかしおそらく、村上春樹の世界ではこの拒絶は生き延びるのだ。